

## 書評

高橋さやか著

### 保育—基礎理論と

### 技術実際—

博文社 昭和三十一年

著者は、序文の中で、次のように述べている。「保育理論は常に実践と共にある理論である。日々の生活の中で、理論の存在は矛盾にみちているようにうけとられる。さまざまな条件がさまざまな複合のし方をしている保育の問題の理論は、単純なものであっても一通りの解明ではことがすまない」著者のいうように、保育の理論は、いろいろの要素を考えねばならない複雑なものである。実際問題に、常に根ざしていなければならないから、理論的な根拠をつくることがむづかしい分野なのである。保育は、「一つの学問として独立した理論的体系をもつことができるのは、方法および技術の面においてである」(P・8)と著者はいわ

れる。「目的論的な意味では、保育も結局は教育から離れて特別に論じられる必要はない」(P・9)という。保育理論の課題をよく示すものであろう。

著者は、さきに、「幼年教育課程論」(博文社 昭和三十八年)を体系的にまとめられたが、本書はさらに保育全般にわたって理論化を試みられた意欲的な労作である。もっとも困難な問題にあえてとりくまれた、著者の保育に対する情熱を各所に見ることができ、内外に数少い書物のひとつである。このような労作がもつとでてゆくことによって、保育は、理論的にも、実際的にも、進歩するであろう。

内容は、大きく二部にわかれていて、第一部は基礎理論、実際についての各論である。基礎理論の序章「児童観および教育方法ならびに方法にかかわる理念の変遷」は、児童中心主義、実用主義、社会民主主義などの児童観を、保育のあり方を追求しつつ評価してあり、示唆に富んでいる。第一章「子どもの発達」は、乳幼児の発達過

程を段階にわけて、著者の立場および保育的観点より解釈している。こまかい点については、児童発達学の進歩とともに改訂される点もでてこようが、著者の特色があらわれている。第二章「習慣形成」は、生活態度までふくめて、広く解している点、賛成である、第三章「子どもの活動と教育」第四章「子どもの能力と教育」は、本書の中心部をなすものであり、教えられるところが多い。第Ⅱ部の技術実際の各論の序章に、「わたくしたちは、技術を大切にしたいと思う。技術を軽視する傾向は、しばしば、理論を尊重する態度と対比的に是認されるようであるが、技術を軽視することは、そのまま理論を軽視することにほかならない」と述べておられるが、敬意を表したい。

保育理論というむづかしい課題にあえて、真正面からまじめに取りくまれ、首尾一貫して一書にまとめられたことは、保育学の確立の上に、高く評価されるべきであると思う。(津守 真)